

三世代にわたる生活文化の伝承と将来への展望(IV)

—食生活と衣生活における祖母との同居・非同居の関連性—

小菅充子, 布施谷節子

Transmission and Prospect of Culture in Life Style in Three Generation Families (IV)

—Relation to live with Grandmother or not in Food Life and Clothing Life—

Mitsuko Kosuge, Setsuko Fuseya

「食」および「衣」の生活文化の伝承の実態について、祖母との同居の関連性を明らかにすることを目的に、検討を行った。研究資料は、2000年に行った本学学生307名とその母親213名のアンケート調査資料である。主な結果は以下の通りである。

- 1) 食生活、衣生活ともに、第二世代（母親）より第三世代（学生）の方が、第一世代（祖母）との同居・非同居の影響を強く受けていた。
- 2) 食生活分野においては、生活文化の伝承の一部が、祖母との同居により担われていることが推測され、特に行事食において、それを確認することが出来た。
- 3) 衣生活分野においては同居・非同居の差が食生活に比べて少なく、衣生活は個人の責任に関わる場所が多いことが明らかになった。
- 4) 食生活においても衣生活においても、同居の母親・学生は日常的に祖母に頼って生活していると思われる現象も、垣間見られた。
- 5) 核家族化が進み、家庭内で経験豊かな第一世代からの生活文化の伝承を授与されにくい現状においては、学校教育や生涯学習教育の中で、積極的に学ばせる必要性を強く訴えるべきと考える。

キーワード：祖母との同居・非同居、食生活、衣生活、行事食、衣服の処分方法

緒 言

家庭における生活文化の伝承の実態を把握するため、本学学生を第三世代、その母親を第二世代、祖母を第一世代とした女性三世代にたいして「食」「衣」「住まいと住み方」「暮らしの中の植物」「生活経営」の5分野にわたってアンケート調査を行い、先にその結果の一

部を報告している^{1),2)}。

このうち「食」においては第一、第二世代共に調理の簡便化、外部化が進んではいるが、両世代間の食生活にそれほど大きな差は見られず、食生活技術や文化の伝承は広い範囲でなされており、一方第三世代においては嗜好性が優先される場合も多く、伝承は狭い範囲に止まっていると報告した。

「衣」においては既製服の直しや洋服・和服の処分方法はすでに第二世代で伝承されなくなっており、衣服の補修など第三世代で途切れる恐れのあるものや三世代間で差のあるものも多く、衣生活技術や文化の伝承はかなり困難になっていると判断された。

なお、これら「食」と「衣」の傾向の違いは、「食」はいまだ共食が基本であるのに対し、「衣」は選んで着るという個人の責任に属する部分が多いからと考察している。

食生活、衣生活いずれにしても、生活文化の伝承がすでに途切れていたり、途切れる恐れがあるということは、女性の有職率の増加や情報化社会の広がり等、社会状況の変革と深い関わりが有ると推測されるが、共に住み暮らすという家族形態が変化し、核家族化が進んだことによる影響も大きいのではないかと考えられる。

そこで同一の調査資料を用いて、食生活と衣生活に関わる生活文化の伝承の違いを、「祖母と同居しているか否か」を解析の切り口として、検討することを本研究の目的とした。

資料ならびに研究方法

研究資料は本学学生307名とその母親213名に対し平成12年1月中に行われたアンケート調査の回答である。

調査項目は「食」分野で28項目、「衣」分野で18項目であり、その詳細および調査対象者の属性については先の報告¹⁾で述べてあるが、第三世代(学生)の第一世代(祖母)との同居率は29.2%と非同居率70.2%の半分にも満たなかった(不明0.6%)。なお第二世代(母親)の第一世代との同居率は31.0%であった。

調査項目毎に祖母との同居か否かで、結果の比較検討を行うこととした。

結果及び考察

第二世代、第三世代別に同居・非同居のカイ二乗検定を行った結果、有意性が認められた項目は表1の通りで、食生活、衣生活ともに、第二世代より第三世代の方が、同居・非同居の影響が強く現れていることが分かる。

具体的に項目別に見て行くと、食生活分野においては、日常の食事状況や家庭における調

理で、祖母（第一世代）との同居の学生（第三世代）・母親（第二世代）共に漬け物を家で漬ける率が高いこと（図1—1）、同居の母親は魚と肉では魚を食べることが多い（図1—2）というように、同居における祖母の影響が見られた。一方、魚をおろすことについて、同居の学生の方が出来ない率が高かった（図1—3）という結果は、祖母や母親まかせで学生が魚の調理に直接関わることが少ないことが原因ではないかと推測される。また土鍋の使用状況についても、同居の学生の方が使用頻度が有意に少なかった（図1—4）が、これは、

表1 第一世代(祖母)と同居・非同居について有意性が認められた項目(カイ二乗検定結果)
(5%または1%水準)

	世 代	質 問 項 目
食生活	第三世代(学生)	漬け物、魚のおろし、土鍋、すり鉢、正月雑煮、おせち料理、赤飯、非常用飲食物の準備
	第二世代(母親)	漬け物、魚と肉、配膳、赤飯、非常用飲食物の準備
衣生活	第三世代(学生)	洋服の処分法、和服の処分法、肌着の着方
	第二世代(母親)	簡単な洋服作り

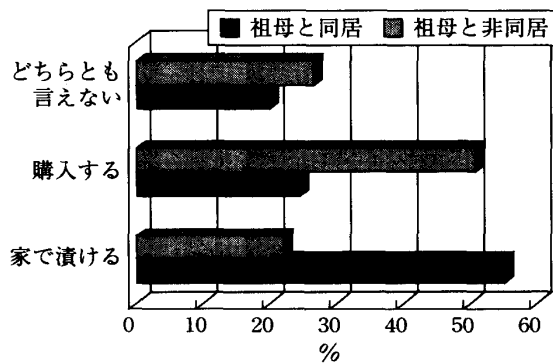


図1—1 漬け物の調理状況 (母親)

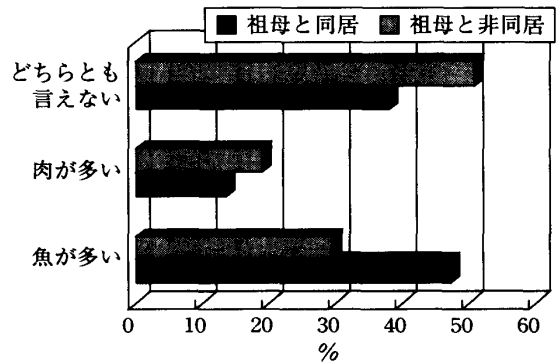


図1—2 魚と肉の摂取状況 (母親)

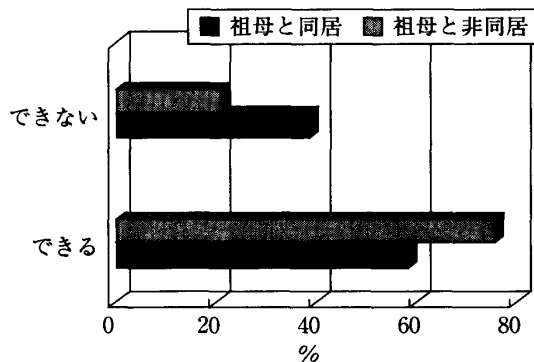


図1—3 魚のおろし (学生)

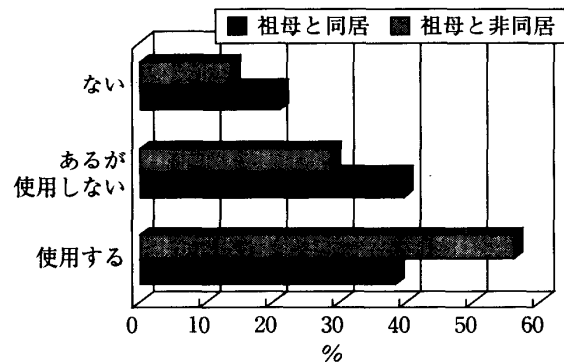


図1—4 土鍋の使用状況 (学生)

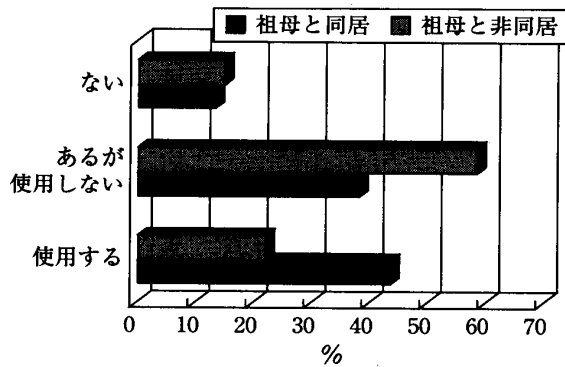


図1-5 すり鉢の使用状況 (学生)

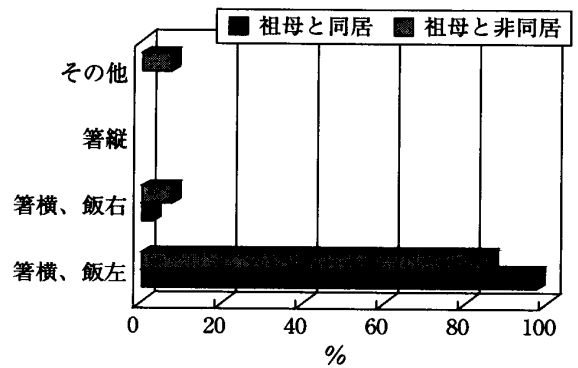


図1-6 飯、汁、箸の配膳 (母親)

三世同居では各世代の生活時間が異なっているために、家族揃って鍋を囲みにくいということも考えられた。平成9年度国民栄養調査の結果³⁾によると、午後7時前に夕食を摂る者は70歳以上では68%を占め、60～69歳でも59%であった。これに対し20歳代の女子では22%にすぎず、三世同時刻に夕食を摂ることの難しさが、土鍋の使用状況からも垣間見えた。土鍋に対し、すり針の使用状況では、同居の学生に使用する比率が高かった(図1-5)が、これは学生本人のみならず、家で使用されているとの結果でもあろうし、ここにも祖母の影響が認められる。

飯、汁、箸の配膳については、先の三世の比較検討¹⁾で、第二世代(母親)と第三世代(学生)の間で差が見られなかったことを報告している。今回の同居・非同居の分析では、同居の母親は非同居の者より正しい配膳が出来る比率が高い(図1-6)という結果となった。しかし学生においては同居、非同居の差は見られず、これは調理実習授業における、教育効果が現れた結果と考察したい。

行事食に関する項目では、祝い事に赤飯を食べるか否かで、学生・母親共に、祖母と同居の者の方が非同居の者より赤飯を食べる比率が高かった(図1-7)。また正月の雑煮についても同居の学生は三が日も食べる比率が高く(図1-8)、おせち料理もほとんど家で作ると答えている比率が高い(図1-9)ことから、同居における祖母の影響の強さが窺える。

非常用の飲食物を日頃から準備してあるかどうかについては、同居の学生も母親も共に用意がない率が非同居より高く(図1-10)、これは厳しい時代を生き抜いて来た祖母の知恵に頼り、特別な用意をしなくても乗り越えられるとの判断か、あるいは、同居の家庭は地方都市に居住していたり、住居形態にゆとりがあるためとも考えられる。

以上、食生活分野においては、28項目中、学生(第三世代)では8項目で、母親(第二世

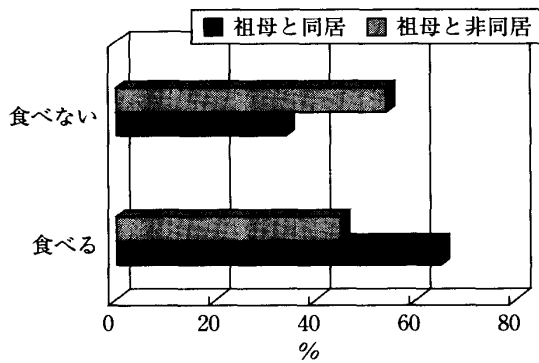


図1-7 祝い事の赤飯 (学生)

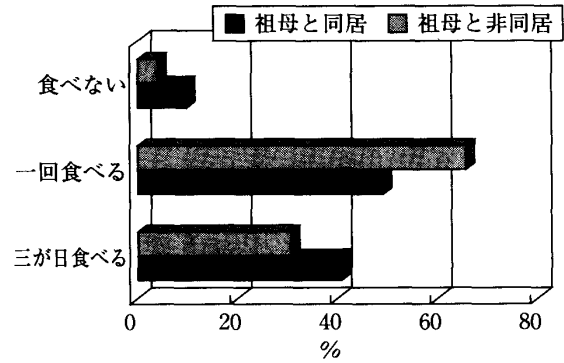


図1-8 正月の雑煮 (学生)

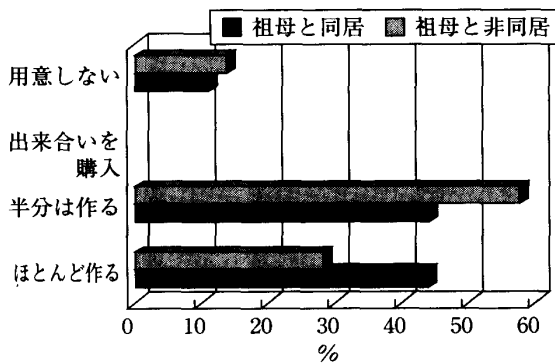


図1-9 おせち料理の調理 (学生)

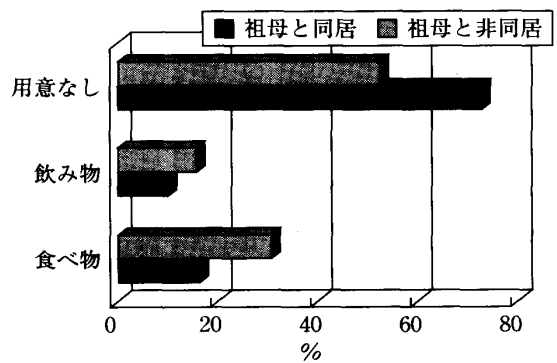


図1-10 非常用飲食物の準備 (学生)

代) では5項目で祖母 (第一世代) との同居・非同居による差が認められた。

漬け物の調理やすり鉢の使用、魚の摂取、配膳の仕方の項目で、祖母との同居の影響が現れ、食文化の伝承の一部が同居により担われていることが推測された。特に行事食においては、祖母との同居が伝承に深く関わっていると確認することが出来た。一方、魚のおろしや非常用飲食物の準備の項目からは、日常的に同居の祖母に頼っていると思われる現象や、土鍋の項目からは、世代間で生活時間に差異があり、同居でありながら、必ずしも同時刻に食事を摂っていないという、食生活の現実も垣間見ることが出来た。

衣生活分野では、食生活と比べて、有意差が認められた項目が少なく、衣生活は個人の責任に関わるが多く、祖母と同居・非同居の影響を受けにくいものと考えられた。

学生において有意差の見られた衣服の処分方法について見てみると、洋服の処分方法 (図2-1) では、同居の学生はタンスの肥やしにして置いたり、知り合いにあげたり、バザーに出したりして、ゴミに出す率が低く、かつ、作り直しの比率が少ないことから、そのままの形での再利用を考えていることが分かる。三世代別の検討¹⁾においても祖母の世代は母親や学生世代と有意に異なった結果を得たことからしても、捨てることに対する勿体ない意識

が、タンスの肥やしになったり、知り合いにあげるという行動になっていた様に思われる。その様な祖母の日頃の意識や行動が、同居の学生に影響を及ぼしていると推測される。

和服の処分方法(図2-2)についても、タンスの肥やしや娘に譲るという選択が多く見られることは、洋服の場合と同じように考えられる。タンスの肥やしという選択は、先に述べた様に、同居世帯の住居形態にゆとりがあるということも一因かと考えられる。

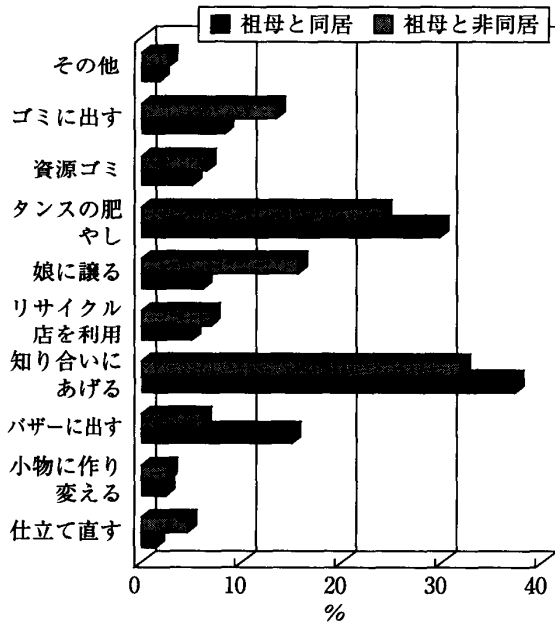


図2-1 洋服の処分方法 (学生)

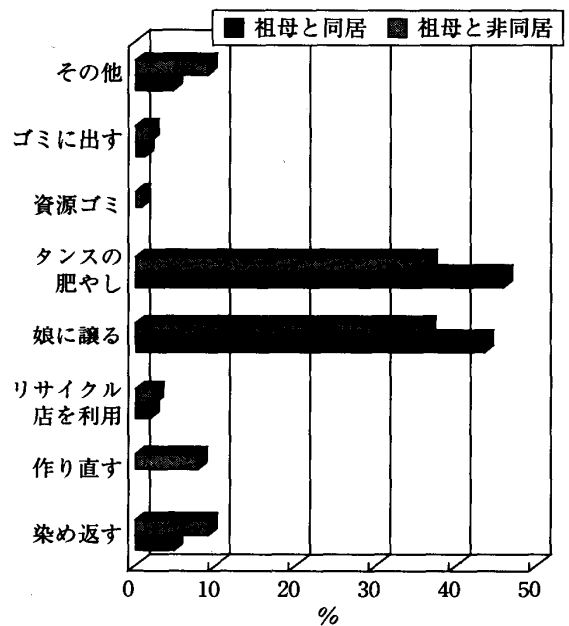


図2-2 和服の処分方法 (学生)

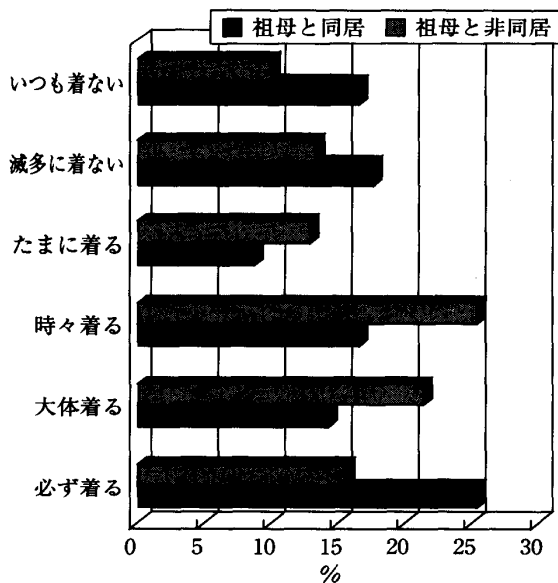


図2-3 春・秋における肌着の着用(学生)

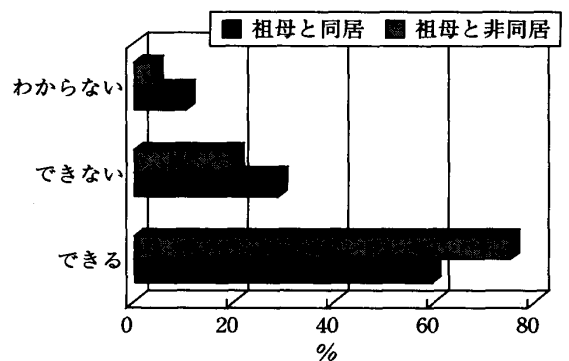


図2-4 簡単な衣服作り(母親)

学生の春・秋における肌着の着用状況（図2—3）については、調査前の予想では、同居の学生の方が、肌着を着用する比率が高いのではないかと考えたが、結果は「いつも着ない」、「減多に着ない」という否定的な回答が同居の学生に多く、着用する場合でも「たまに」、「時々」、「大体」の比率で非同居の学生の方が着用率が高いという結果であった。ただし、「必ず着る」という点で、同居の学生の方が高い比率を示した。このこだわりのある着用が、祖母の影響を感じさせる点である。最近では、空調設備の普及で、通年に渡り快適な環境が作られている。従って、若者を中心に季節感のない衣服の着用の仕方が多く見られる。肌着を着なくても、温室調節がしやすい、上に羽織って着る重ね着の方が便利と言うことになるのであろうか。中学・高等学校で、衣服の保健衛生的な機能についての学習が行われているはずであるが、なかなか実生活では実践されないものと思われる。高校生の冬季の通学服についての調査⁴⁾でも、制服が指定されている場合でも、肌着を着ないという生徒は、男子で59%、女子で38.7%にも達するという結果からもいえることである。

同居の母親の場合を見ると、簡単な衣服が作れるかどうかについて、カイ二乗検定で5%水準で有意性が認められた（図2—4）。同居の母親は、非同居の母親と比べると、「できない」、「わからない」比率が高く、祖母（母親または姑）に頼っている様子がわかる。非同居の母親は、必要に迫られれば、服作りを実践せざるをえないということもあろう。同居・非同居にかかわらず、最近の母親世代は簡単な衣装作り（子供服、パジャマ、スカートなど）は、やればできるというものの、日常における必要性を認めていないという現実がある⁵⁾。

以上の結果を踏まえて、次世代に残すべき、その教育的方法を考えてみた。

昔から、生活文化は家庭内で代々と受け継がれて来たが、今日の急激な社会変化の中では、生活文化の伝承のされ方も変化し、今後もその勢いは加速されることであろう。将来、更なる核家族化や女性の有職率の増加に伴い、「食」や「衣」の家庭外依存度が増加することは、十分予想出来る。伝統的な知識や技術の学習経験の有る無しが、「食」や「衣」の選択の差異の判断基準に大きく影響することは想像に難くない。豊かな経験が、多様な選択肢の中から望ましい選択が出来たり、消費者としての意見を積極的に発言出来る態度を生むものと考察する。

今回、食生活においても、衣生活においても、祖母との同居の場合には、非同居よりも多くの生活文化の伝承がなされていた結果を得たことは、生活を豊かにするための知識を増幅させる手立てとして、各世代間で更なる相互交流を推し進める必要があることを、確認出来たと考える。

家庭内で第一世代と第三世代の直接的な交流が計りにくい核家族化の増加現象の中では、

学校教育を通して、各家庭へ生活文化の浸透を図ることが重要なことと考える。そのため小学校から大学までの学校教育の中で、伝統を学ぶ学習や、地域社会のお年寄りとの交流の必要性を強く訴えるべきである。更には、第三世代だけではなく、第二世代にも既に伝承が途切れたり、途切れつつある現状を踏まえて、生涯学習教育の中でも生活文化を意識的に紹介することも大切なことであろう。

要 約

筆者らは前報^{1),2)}で、本学学生およびその母親、祖母の女性三世代にわたる生活文化に関するアンケート調査より、世代間の相違と伝承の実態を明らかにした。その結果、生活文化の伝承は途絶えつつあることを実感し、その原因の一つに第一世代との同居の減少、即ち、核家族の増加を考えた。

そこで本報では、同一の調査資料を用いて、「食」と「衣」の生活文化の伝承に、祖母との同居・非同居が影響を与えるか否かについて検討を行った。主な結果は以下の通りである。

- 1) 食生活、衣生活ともに、第二世代(母親)より第三世代(学生)の方が、第一世代(祖母)との同居・非同居の影響を強く受けていた。
- 2) 食生活分野では、第一世代と同居している第二世代は、漬け物は家で漬ける、魚と肉では魚を食べる、祝い事には赤飯を食べることがそれぞれ多く、正しい配膳が出来るという項目で、非同居者との有意差が見られた。
- 3) 第三世代では、正月に雑煮を食べる点でも差が見られた。しかし、日頃非常用の飲食物を用意してあるか否かでは、同居者の方が有意に少なく、また魚のおろしが出来る者も同居者に少なかった。
- 4) 衣生活分野では、同居・非同居の差が食生活分野に比べて少なく、衣生活は個人の責任に関わる場所が多いことが明らかになった。
- 5) 第三世代では不用となった洋服や和服の処分法や肌着の着用の項目で同居・非同居に有意の差が見られた。一方、第二世代においては、簡単な衣服作りにおいて同居者に「できない」比率が高かった。
- 6) 伝統的な知識や技術の学習経験の有る無しが、多様な選択肢の中から、望ましい選択を行えることを考えるとき、核家族化が進み、家庭内で経験豊かな第一世代からの生活文化の伝承を授与されにくい現状においては、学校教育や生涯学習教育の中で、積極的に学ばせる必要性を強く訴えるべきであろう。

なお、本報告の一部は平成13年度日本家政学会第53回大会において発表した。

文 献

- 1) 小菅充子、布施谷節子：三世代にわたる生活文化の伝承と将来への展望(Ⅰ)—食生活と衣生活について—、和洋女子大学紀要、41、97-106、(2001)
- 2) 中島明子、名取史織、三善勝代：三世代にわたる生活文化の伝承と将来への展望(Ⅱ)—住生活、暮らしの中の植物および生活経営について—、和洋女子大学紀要、41、107-118、(2001)
- 3) 厚生省保険医療局地域保険・健康増進栄養課生活習慣病対策室監修：国民栄養の現状、p. 126 (1999) 第一出版
- 4) 坂口志津子、田上和子他：首都圏における高校生の冬季通学服に関する研究、家庭科教育、75巻7号、69-75 (2001)
- 5) 布施谷節子、高部啓子：女子短大生と両親の被服製作技術に対する意識、日本家政学会第52回研究発表要旨集、p. 212 (2000)

小 菅 充 子 (家政学部生活環境学科教授)

布 施 谷 節 子 (家政学部生活環境学科助教授)